

第16回 日本臨床薬理学会 1995年11月1～2日 東京・明治記念館

臨床実習における臨床薬理学教育の新しい試み

大橋 京一*¹ 西本 雅彦*¹ 木村 雅彦*¹
 小菅 和仁*¹ 吉見 輝也*² 中島 光好*³

目的：薬物を適正に使用することは極めて重要であり、臨床薬理学の教育目標の一つである。しかしながら医学教育においては臨床診断学が依然として主体を占めており、薬物治療学が置き去りにされている現状がある。このことは薬物の副作用、薬効評価等において種々の問題が指摘されている。また医学教育法においても知識を与える従来の講義中心主義から態度、価値観を学ぶ実習中心主義への変換が試みられている。卒前教育における臨床薬理学の教育法についても考え直す必要があるものと思われる。そこで内科臨床実習の中に臨床薬理学実習を組み込み、実際の症例を通して薬物治療学の教育を開始した。学生の实習、および臨床薬理学に対する認識を把握するためにアンケート調査をおこなった。

方法：内科ポリクリを1週間にわたり実習する5-6年生の1グループ4-5名を対象とした。このうち2日間の半日を臨床薬理学実習にあてた。内科症例より薬物療法上重要な薬を使用している症例を提示し、学生が主治医としての役割を演じさせ、討議を通して実習目標の到達をはかった。実習目標としては薬物療法の基本原則を修得することと薬物の副作用について理解することとした。実習終了後に、本実習および臨床薬理学に対する認識を把握するため、各質問について10点満点のスケールを用いてアンケート調査を実施した。実習を終了し、アンケートを回収した60名の学生について解析をおこなった。

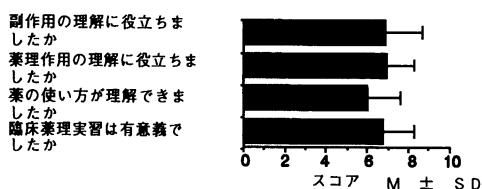


Fig.1 臨床薬理学実習のアンケート

結果と考察：薬物治療に関する実習を今まで受けたことがないと答えた学生は96%であり、薬物治療学の実習が今までほとんど行われていなかったことを示している。「臨床薬理学実習の必要性について」の問いには89.8%の学生が「極めて」、「かなり」必要であると答えている。「薬の副作用の理解に役立った」、あるいは「薬理作用の理解に役立ったか」の問いに「極めて」、「かなり」役立ったと答えた学生はそれぞれ72%、67.3%であった。このことは実際の症例を通して、副作用、薬理作用の整理に有効であることを示している。一方、本実習において薬の使い方が「極めて」、「かなり」理解できたと答えた学生は51.9%と低い割合であった。この原因の一つは実習に十分な時間がとれなかったことが考えられ改良すべき点である。また学生に臨床薬理学が関与する項目について関心の程度を質問したところ、薬と倫理、TDM、新薬の開発の項目について「極めて」、「かなり」関心が高い学生は半数以下であった。この結果は治験や倫理的問題について卒前教育において繰り返し教育する必要があることを示している。この実習後の学生の要望では1) 実習時間を増やしてほしい、2) 多くの症例

*¹ 浜松医科大学臨床薬理学
〒431-31 浜松市半田町 3600

*² 浜松医科大学第二内科

*³ 浜松医科大学薬理学

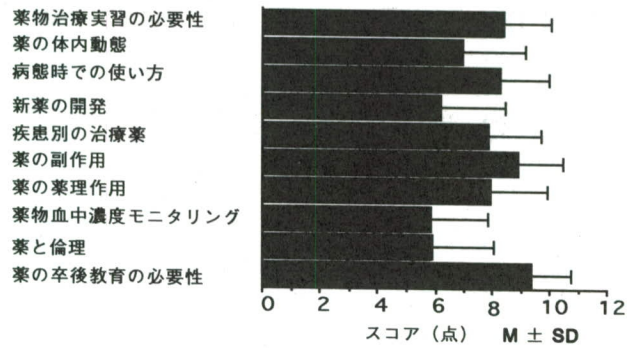


Fig.2 医学部6年生の臨床薬理に関する項目の興味

についての薬物治療について学びたい、3) 内科ポリクリが始まる前に実施してほしいなどが挙げられた。これらの感想は学生が本実習の必要性についての意識が高いものと考えられた。

結語：内科臨床実習の中に臨床薬理学教育を組み込むことは学生の薬物治療に対する関心を高め、適切な薬物使用についての意識を持たせるのに有意義であると思われた。新薬の開発、臨床試験をめぐる倫理的問題など社会的な問題点について学生の興味が乏しいことは今後の卒前教育の課題であろう。